

# 利子でついた時の鐘

大正大学教授 玉山成元

鐘に恨みは数々ござる。初夜の鐘を撞くときは、諸行無常とひびくなり。…長唄の名曲『京鹿子娘道成寺』のすばらしい音色とともに、きらびやかな舞台がぱつと広がる。春爛漫の明るさは、晴れやかな白拍子の姿とともに、幽玄の世界へと導いてゆく。道成寺の鐘供養の情景である。祐天寺でもにぎやかに鐘供養が行われた。

梵鐘完成の十年後元文三年（一七三八）、文昭院（將軍徳川家宣）の二十七回忌の追善として、ふたたび天英院（家宣室）から昼夜十二時の時の鐘にするようにと命令があった。そして同年八月二十一日、御用人酒井が使いとなり、書状と金子（錢）を持ってきた。この書状によると、方々にある時の鐘の費用は一樣でないが、増上寺切り通しの鐘は一か年分二四両余で勤めている。だから祐天寺の鐘もこれと同じようにしろという。そして永代撞き料として二百両を寄進された。

ところが面白いことに、利子で運用するようという。つまり金は二百両やる。

これを年一割半の利子で貸せば三〇両になる。切り通しの鐘は一年に二四両余で撞くのだから、祐天寺の鐘もこれと同様にすれば一年に五兩余分になる。だから十分にあるのこ利子で永久に撞くようにしろという。撞き料が一年間に二五両かかれれば、二百両寄進しても八年間の費用にしかならない。それでは永代鐘撞料にはならない。そこで当時行われていた高利貸しをさせ、二百両を元金として、その利子を永代鐘撞料にしろという。それにしても利子が入るのは来年であるから、今年分として二〇両、つごう二二〇両を寄進された。

喜こんだ祐天寺では、早速時の鐘を撞いてもよいかどうか伺ったところ、十月十四日の文昭院の二十七回忌の当日から撞くようにとのことであった。九月十九日に、来る十月九・十・十一の三日間供養の法要をすることが決められ、同二十日には、天英院が着用していた服三重を下された。これを袈裟にして法要のとき着用するようにとのことであった。こ

の袈裟は現存しないが、御台所の着用したものに、美しいものであったに相違ない。それにしても自分の着物を袈裟に仕立てて、亡夫の回向のときに着用するようという天英院の気持ちは奥ゆかしい。將軍家宣在世のときに用いた、きらびやかな打掛は家宣に供養し、以後自分分は質素に世を送りたいという気持ちからであろう。天英院の奥ゆかしい清楚な心が感じられて気持ちよい。

また二十七日天英院は、供養のときに使うようにと紫縮緬御紋付幕四張、晒御紋付幕六張と提灯をとどけられた。そして十月一日には、引き物までこちらで用意するから決して心配しないようにとの申し入れがあり、供養式前日の八日には、文昭院前・如来前・内仏前・開山前など、それぞれへ御供え物までとどけられた。このように天英院の気くばりかたは異常なほどであった。

供養式当日の九日は、朝四時から法要が始められた。天英院は名代として侍女秀小路を参詣させ、仏前あるいは住職の

# 鐘の時のついた子利

大正大学教授 玉山成元

祐海上人らに施物をした。この法要は非常に盛大で、享保十四年の十七回忌にちなんで行われた鐘供養と変わりなかった。

この梵鐘と鐘楼、あるいは時の鐘の撞き料を寄進したことは、直接には亡き夫家宣への追善であったに相違ない。しかしその裏には、祐天上人への並々ならぬ信仰があったからにほかならない。祐天上人の廟所を建て、住職の祐海上人に自分の打掛を与えて袈裟を作らせ、そして境内の整備まで心を砕いたということは、祐天上人への信仰でなくては、いや天英院ばかりでなく、大奥の人々にとって、祐天上人は阿弥陀様であり、將軍様を極楽まで導き、やがて彼女たちも同じ蓮の台に導いてくれる大切な仏であった。

將軍家宣なきあと、將軍家継あるいは吉宗の時代に、天英院がこうした施物を行うことができたのは、家継にも吉宗にも、またこの將軍を取りまく人々の間にも、祐天上人への信仰が根強くしみこんでいたからに他ならない。享保三年（一

七一八）四月、家継三回忌で増上寺に参詣した吉宗は、老衰で閑居していた祐天上人に無理をいつて会い、お十念を受け、

ゆつくり法話を聞いた。身体不自由のため、無礼があつてはいけないと遠慮した祐天上人であつたが、行儀など少しも気にしない吉宗の厚い信仰心に負け、またそれにも勝る周囲のあたたかい配慮で法話を続けたのが、祐天上人の最後の説法であつた。吉宗がかわいがつた本徳院に「今の世に出家は祐天上人一人なり」といった言葉が示すように、吉宗も心から祐天上人を尊敬した一人であり、だからこそあえて無理な説法をねがつたのである。將軍をはじめ、大衆の人々までこのように祐天上人を尊敬していたのであるから、麻布に隠居された祐天上人のもとへ、連日にわたつて善男善女がおしかけたという伝記の記録は、決して大げさに記したのではない。約三百年後の今日でさえ、上人の独特なお名号が多数残っているのは、祐天上人への信仰が本物であつたという証拠である。私たちはも

っともつと祐天上人の徳を讃仰し、世間に知ってもらふ必要を感じる。